平成22年度　歴史移動展

「標茶町郷土館 その建物の謎」

～郷土館から標茶の歴史を探る～

現在、郷土館として使われている、白亜の洋風２階建て建築物はもともと釧路集治監本館として建設されました。明治19年に建設し、明治・大正・昭和、そして平成に至る現在まで標茶と共に歩み、今年には誕生125年目を迎えます。

今回はなかなか知る機会のない、この建物に秘められたさまざまな謎と歴史を紐解くことで、標茶の歴史その一端を紹介します。

開催日程	開催場所
１月12日～23日	開発センター　ロビー
24日～31日	磯分内酪農センター　ロビー
31日～２月７日	虹別酪農センター　ロビー

• 開催日初日は午後からの展示となります。
　２月以降の開催日程は、随時広報でお知らせします。

郷土館より一筆啓上

今年度、標茶町郷土館で耐震に関する調査が行われました。

北海道にとっても“宝”となるこの建物を、今後も大切に受け継いでいきたいですね。　（坪）

しべちゃ※しうんと

「シラルトロ沼」

◇湖なの？沼なの？

「シラルトロ〝沼〟ではなく、シラルトロ〝湖〟では？」と思われた方もいると思います。一般的には「湖」と呼ばれていますが、シラルトロ沼は浅く（最大水深2.8ｍ）、水中で育つ水草（沈水植物）が中心部でも生えているので、学術上は「沼」に区分されます。

シラルトロ沼

◇昔は海だった！

今からおよそ６千年前（縄文時代）、世界的に気温が高かったため、海の水位が上がり、現在の釧路湿原一帯は海でした。そのころの釧路湾の海岸線は、南標茶あたりにあったそうです。これを「縄文海進」と呼んでいます。

およそ５千～４千年前になると気温が低くなり、徐々に海水がひいていきます。やがてシラルトロ沼や塘路湖、達古武沼の水は取り残され、現在のような湖沼となりました。このような湖沼を「海跡湖」といいます。

◇生き物同士のつながり

シラルトロ沼には「蝶の森」と呼ばれる森があり、遊歩道を散策することができます。「蝶の森」には、チョウの幼虫のエサとなる植物が生えています。例えば春の「蝶の森」ではさまざまなスミレを楽しむことができます。ミドリヒョウモンというチョウの幼虫は、そのスミレを食べて夏にチョウとなるのです。

またチョウをはじめ、さまざまな虫の幼虫は野鳥にとって大切な食料です。春～初夏の「蝶の森」ではウグイスやセンダイムシクイなど、野鳥の声がにぎやかなことからも感じることができます。

シラルトロ沼は夏になると、水面に葉を広げるヒシという植物で緑に覆われます。このヒシの実は、水鳥の大切な食料となります。秋または春、シラルトロ沼には渡っていくヒシクイ（ガンの仲間）が集

不定期掲載 郷土館 お宝発見！

郷土館に眠る数々の逸品。みなさんが大切に使い郷土館に寄贈された資料は、それぞれが「お宝」で価値は付けられませんが、その中でとても珍しい品を紹介します。

今回は標茶消防団の前身である熊牛消防組が使った龍吐水（りゅうどすい）を紹介します。龍吐水とは、現在のポンプのように水を放水する道具ですが、十数mしか届きません。これは火災物に対して使うのではなく、住居火災の時に、屋根の上に立つ纏（まとい）持ちに向かって放水し、火消したちの士気を高めるために使われました。屋根の上に登り指揮をとる纏持ちは、火災の熱のため、水を体にかけてもらわないと保たなかったそうです。龍吐水の水は纏持ちにかかった瞬間に熱湯となり、下に流れたというお話が残っています。

この龍吐水は、田中又八氏の斡旋で青森県より明治21年に購入したものです。龍吐水は、当時標茶市街にあった釧路集治監から脱走する囚人の警戒のために購入されたものでした。そして龍吐水購入が一つのきっかけとなり、標茶に義勇消防が設置されました。その後「私設熊牛消防組」が誕生し、現在の標茶消防団に繋がっていきました。なお初代組長は写真店を営んでいた島田清兵衛氏で、田中氏も消防組員となりました。

龍吐水はその後、「消防記念物」として北海道消防協会で保管されました。昭和45年に雨ざらしのような状態で置かれていた龍吐水を本町で引き取り、以後郷土館で保管しています。引き取った時点でかなり傷んでおり破損が目立ちますが、側面に彫られた「熊牛」の文字は現在でもはっきりと見ることができます。道東で最古級の消防設備品です。

奥に保管されている龍吐水。
なお龍吐水手前の赤茶色の箱は、その後使われた人力の鉄製ポンプ。

まってくることからもそれを感じることができます。

冬のシラルトロ沼の大部分は凍っていますが、温泉が湧いているところや大きな河川は凍りません。そのような場所では魚を狙ってカワセミが現れたり、魚やカモ（ときにシカの死体）を狙ってオジロワシ、オオワシが集まります。

こういった生き物同士のつながりは、シラルトロ沼のキャンプ場の隣にあるミニビジターセンター（冬季閉鎖）に、大きなパネルで解説されています。たくさんの生き物パネルに戸惑うかもしれませんが、生き物一つに注目して見てください。たった一種類の生き物にも、さまざまな生き物が関わっていることが分かります。

シロスミレ

◇自然と歴史とのつながり

そこに自然があれば、その自然を利用する昔からの人の営みがあります。前にお話ししましたが、釧路湿原は縄文時代では海でした。湿原周辺には縄文時代から続く、たくさんの遺跡があります。

シラルトロ沼に面した温泉施設の周辺も縄文時代の遺跡があり、その時代は魚や貝を採るのに最適だったことでしょう。また温泉施設の建物の裏側、シラルトロ沼に面した高台にはアイヌ時代のチャシの跡があります。現在は少々木々が繁っていますが、チャシの上に立つと、シラルトロ沼を見渡すことができ、見張りには最適だということが分かります。「蝶の森」には、昭和初期と思われる炭焼きの跡がありますが、確かに蝶の森には幾度か切られたせいか、根元からいくつもの幹が出ている木を見つけることができます。

このように自然をみると歴史が見えてくる、また逆に歴史を見ることで自然が見えてきます。

◇シラルトロ沼の面白さ

このようにシラルトロ沼は一つの生き物だけ、季節だけ、自然だけ、歴史だけにとどまらず、生き物同士のつながりや、季節のつながり、人と自然のつながりを感じさせてくれる大変興味深い場所なのです。